

## 「江戸しぐさ」に見る陽明学の影響

森田 育代

Influence of Doctrines of Wang Yang-ming on “Edo Mannerisms”

Ikuyo Morita

### 1. はじめに

昨今若者や子どもの礼儀作法やマナーの欠如が論じられ、中学生や高校生に社会人マナーを授業や特別講座で教える学校が出てきている。家庭で子どもの躰まで手が廻らないという事情であろう。他方では就職活動中の学生の面接時のマナー指導、新入社員対象のビジネスマナー研修、マナー本、女性対象のマナー教室、カルチャー教室でのマナー講座など、学生用、大人用や女性用の様々なマナーや礼儀作法教室が増えてきた。小中高校でマナーや躰について学べなかった大学生が、就職面接に備えて急速マナーを身につける必要が生じ、付け焼刃的に学習している現状である。上記のマナー教室や講座、マニュアル本が現在の社会で需要があるということは、それだけ今の若者が礼儀作法やマナーを知らないで過ごしているということである。

また多くの家庭ではさして保護者が子どもに、躰について教えなければならないという意識もないようである。学校の先生に教えてもらいなさいと言う「教師依存型」の保護者も増えている。頼られる教師も若い教師であれば、大学の教育課程でマナーについて講義を受けていないのが現状である。教師は100%何でもできるわけではない。

日本には昔から家庭で立派な躰が存在していた。家では祖父母が「躰」として折に触れ孫に礼儀作法を教えていた。または親が子に叱るべきときにきっぱりと叱り、周囲の人と円満に生活していく知恵などを教え、結果的に礼儀作法を子どもは身につけていた。しかし核家族の増加に伴い、母親が外で働くことが多くなった現代、親子が触れ合う時間が減少、子どもが他の子どもと喧嘩している様子も分からず、どのような場合に「躰」として学習させればよいのかなども掴みにくい。家庭で礼儀作法を教えることはかなり困難な状態になっている。子どもの親世代もすでに核家族で育った人たちが礼儀作法を親や祖父母から教わっていることは少なく、昔から伝わってきた家庭内の礼儀作法教育は大方途絶えてしまったと思われる。

江戸時代に町民の中から生まれ、町民の間で広まった江戸しぐさというものがある。最近この江戸しぐさが注目を浴び、社員教育や学校教育で使われ、指導されるようになった。それは、江

江戸しぐさの語り部である越川禮子氏が本にして世に出したことにより、広く世間に知られるきっかけとなったためだと言える。

文書化された資料はなく、口承の形で秘かに伝わってきた江戸しぐさに焦点を当て、「江戸礼儀作法」や「江戸礼法」など格式高い名前では呼ばず、「江戸しぐさ」と呼んだ江戸の庶民の礼儀作法、庶民の処世訓である江戸しぐさの底に流れる人間の生き方がどのような思想に影響を受けたかについて考察する。

## 2. 先行研究

陽明学の研究者である林田明大は、江戸しぐさは陽明学が育んだと述べている。『「江戸しぐさ」完全理解』株式会社三五館、2006年、p. 130

また越川禮子は「知行合一」の思想は江戸しぐさと瓜二つとも述べている。『「江戸しぐさ」完全理解』株式会社三五館、2006年、p. 172

## 3. 江戸しぐさの起源

江戸しぐさは江戸時代に町民、特に商人から自然発生的に生まれたもので創始者が居るわけではない。元々は「繁盛しぐさ」や「商人しぐさ」とも言われた。商人による商売繁盛のための処世術のしぐさであった。前述の越川氏はこれを商人道と呼ぶ。しかし時を経て、商人が商売が繁盛することだけを目指した利得主義目的ではなくなり、社会生活でいさかい無く安泰に暮らすために生み出した処世訓および処世術に変わっていった。現代の言葉で言えば社会人マナーであった。江戸には多数の講が存在し、その講で町の指導者が仲間や若い者に江戸しぐさを講義し伝授していった。將軍家に入出入りする大店の商人がリーダーとなって講を運営していったと考えられる。その講では単に商売繁盛の処世術を指導するのではなく、次第に人間関係を良好にしていく処世訓や実践しぐさが伝授された。商人は商売を引き継ぐ後継者の息子などに真面目に商売に精を出してもらうためにもこのような講で処世訓、処世術、人間関係学および店主としての経営学を学ばせようとした。当時江戸には約100万人の人間がひしめき合って住んでいた。江戸しぐさには社会生活が円満に、トラブルなしに過ごせるように他人を大切に思う心、思いやりの心、敬う心、謙虚な心を行動に表すしぐさが多数見られる。江戸しぐさは「あれこれいろいろと知恵を絞り、工夫を重ねて磨き上げた人づき合いのノウハウがベースとなっています。」<sup>1)</sup>

小笠原流礼法が武士の礼法として室町時代に生まれ、連綿と伝わっていき、江戸時代には小笠原家が將軍家に礼法を指南していたこと、伝書が宗家に保存されていることなどに対し、江戸しぐさは江戸時代に商人から生まれ、向上心のある商人が講で学んだもので正式な文書では残っていないこととは対照的である。

#### 4. 江戸しぐさの代表的なもの

江戸しぐさの代表的なものをここに挙げる。すべて越川、林田の著書『江戸しぐさ』完全理解 pp. 190-210, 越川の著書『暮らしうるおう江戸しぐさ』 p. 140, 越川の『図説 暮らしとときたりが見えてくる江戸しぐさ』 p. 77 からの一部抜粋である。○印以下 筆者

##### 繁盛しぐさ（商人道）の例

1. 『腕組みしぐさ』『足組みしぐさ』は衰運のしるし江戸の商人にとって、腕組みや足組みは衰運のしるしと言われました。いずれも相手に対しての敬意が感じられません。
  - 腕組みは他者から見ると威圧感を感じる。お客様は神様ですという言葉があるように、決して店側が上の側に立ってはいけません。さもなくば客は来ないという教えであり、現代にも十分通用する教えである。
2. 「プラスアルファの気働き」旅籠<sup>はたご</sup>などでは、旅人の足をすすぎながら、わらじの鼻緒が傷んでいるのに気付くと、道中で切れたら難儀をすと思いやり、新しいものを用意してあげたそうです。
  - この教えも現代の職場で十分通用するものである。

##### 相手を尊重する江戸しぐさ（処世訓）

3. 「死んだらごめん」江戸っ子にとって、約束を守るのは人間の条件、どんなに小さな口約束でも破るのはご法度でした。どうしても守れないのは死んだときだけ。だから「死んだらごめん」というのです。子供にも「指切りげんまん、嘘ついたら針千本吞ます」の歌で、幼い頃から約束の大切さを教え込みました。
  - 「指きりげんまん」のげんまんは越川によると拳骨万回という意味である。最近はこのような言葉も子どもの間で聞かれなくなった。「拳骨万回」や「針千本吞ます」が暴力的なためであろう。
4. 「お心肥<sup>しんこわ</sup>」江戸しぐさの真髄ともいえる言葉。人間はおいしいものを食べて、体を肥やすことばかり優先するが、それ以上に心を豊かにし、学問（「四書五経」）を学び、人格を磨くことに努めるべきだという戒めです。（後略）
  - 江戸時代の町民は四書五経の学びを、儒教に詳しい人を講師に迎えてお互いに勉強していたことが推測できる。向学心豊かな人々が居たということである。
5. 「三脱<sup>さんだつ</sup>の教え」初対面の人には年齢、職業、地位を聞かないルール。この三つの先入観が入ると、とかくフィルターをかけて人を判断してしまいがちで、本当の人間を見る観察力、洞察力が曇ってしまうからです。（後略）
  - 出身大学、勤務先を気にする日本人であるが、江戸時代このような教えを町人に指導

し、洞察力を養っていったと推察する。

6. 「結界<sup>けっかい</sup>わかまえ」自分の立場、力量、器量を客観的に把握しておくこと。自分を正しく評価することは案外むずかしいものです。(中略) 立場をわかまえず何にでも口を出し、他人の領分を侵す者は嫌われました。
  - 現在では結界という言葉はお茶席や礼法の世界では生きているが、一般では知っている人は少ない。上司に偉そうに物言いをする若い社員、教員に友達に対すると同じような言葉遣いをする学生など、結界わかまえの認識ができていない人々が多い。上下関係の何たるかを知らない人、自分の立場を理解していない若者、他者とのけじめがつけられない人間などが多い。父親のことを～君と呼ぶ娘など、親しみとすることを履き違えている。
7. 「『威張る』『自慢』は最悪」互角のつき合いを基本とした江戸しぐさでは、弱い立場の者に威張るのは最低とされました。自分をひけらかす自慢もそっぽを向けられます。(後略)
  - 商人たちは士農工商の身分制度のなかで被支配者階級であったため、その中では相憐れみの心から発するお互いが同等という考えで生活していたのである。

#### 生活しぐさ

8. 「肩引き」人とすれ違うときに右肩、右腕を後へ引いて、互いにつつからないようにするしぐさ。混み合う江戸の下町では、互いを人間として尊重し思いやる挨拶(信号・合図)しぐさでした。
  - 江戸の道路は人間も車も左側通行であったので、対向する人が来れば右肩を引いて道幅を広く使った。現在では人は右側通行なので左肩、左腕を引いて通行する。賢明な社会人マナーである。
9. 「七三歩き」江戸では道路の七割は公道、自分が歩くのは道の端の三割と心得て、急ぎの用事がある人や荷を運ぶ車に道を譲りました。おかげで急病人や急用の飛脚は邪魔されずに走れたのです。(後略)
  - この教えを是非現代の若者に指導したいものである。歩道いっぱい到我が物顔で歩く学生に、生活道路として使う近隣の住民から文句が出て、大学から道の歩き方を指導する人が道路に出ているぐらいである。
10. 「蟹歩き」江戸の町は往來を少し入ると細い路地が網目のように広がり、そこに入り口が密集していました。路地を行き交う時はお互い蟹のように横に歩くのが、狭い道を譲り合う思いやりでした。
  - 現代では狭い路地で対向者が来たとき、若者のほうが堂々と正面から来、礼儀作法を心得ている年配者が道を譲っている。先に歩いて来た者が勝ちという考えなのか、譲られても会釈もしない。

11. 「傘かしげ」雨や雪の日、互いに濡れないように、傘を人のいない外側にすつと傾<sup>かし</sup>げてすれ違うしぐさ。江戸しぐさの中でも特に認知の高い往来しぐさです。
  - 認知の高い往来しぐさとありますが、現代ではこちらが傘かしげをしても、相手は注意散漫なのか、教えられていないのか、傘を傾げず通り過ぎる人が多いと感じます。心の貧しい人間が増えたということである。
12. 「こぶし腰浮かせ」江戸では渡し場で舟が出るのを待っているとき、後から乗ってきた客のためにこぶし分だけ腰を浮かせて席を詰めるのが当たり前のしぐさでした。「詰めてください」と指示されなければ動けないのは野暮。(後略)
  - このセンスでいくと現代の電車の中には野暮な人が多い。是非野暮を卒業して粋な人間になってほしいものである。
13. 「会釈のまなざし」すれ違いに交わす思いやりの目つき。江戸っ子は無気力、無表情を嫌いました。知った者同士が会釈するのは当たり前、赤の他人でもすれ違うときいつくしみまなざしを交わしました。まなざしは人間性をあらわす鏡のようなものです。
  - 現代、赤の他人に会釈のまなざしを行うと変人と思われる心の貧しい時代になっている。
14. 「魚屋しぐさ」子どもの目に入らないところで刃物を使う。危険なものはあえて見せなかった。
  - 天秤棒に桶を下げて魚屋は江戸の町をまわって魚を売っていた。しかし幼児の目に包丁さばきをしている姿が入らないように魚をさばいた。幼児が真似をしないようにとの気遣いであった。

## 5. 江戸しぐさと江戸思草<sup>しぐさ</sup>

江戸しぐさの「しぐさ」は正式には「思草」と書く。一般的に「仕草」とは「ある物事をするときの、動作や表情」である<sup>2)</sup>。しかし越川によると江戸思草の『思草』の『思』は思う・思考で、『草』は行為・アクションを指します。たとえば親に生意気な口を利く子供に向かって、『子供のくせにその言い草は何だ』『あいつの言い草が気に入らない』<sup>3)</sup>などを使っている言葉である。書道の書体の格式からみると真行草の草であるから、正式ではない、くずしたという意味がある。思草とは格式ばった正式なものではなく、気さくな日常の所作といえる。江戸思草にあるしぐさ(思草)はどれも日常の庶民の生活に密着した、堅苦しくなく自然な形で相手を大事にし、思いやる行動が多い。武士とは正式に関わることがない庶民生活では日常の生活の中で人間関係を円滑に進める処世術が必要であったのである。「思草」の草の字はこの観点から相応しい字である。また「思草」の思うという字は「相手を思う気遣いの心」を意味している。相手に対して思いやることが所作に表れたものと捉えられる。

## 6. 屈辱を乗り越えるための共生、互助精神

徳川時代の江戸では日本各地から人々が集まり、百万人の大都市であった。士農工商の身分制度の中で最も身分の低い商人たちが、共に助け合い、身分格差に耐え、乗り越えようと励みあった集まりが講であったのではないか。「士農工商」の身分制度の捉え方には諸説があり、支配階級を指すのは武士だけで、その他の「農工商」の人たちは被支配階級であり、農、工、商人のはっきりした区別はなかったとする説もある。この拙論では士農工商の4段階の身分が存在したとして論じる。儒教の教えの影響により、土地に根ざして体を動かして物を生産する農民は身分が高く、労働せずに利益を得る商人は身分が最も低い層だと決め付けられてしまった商人たちはその屈辱を感じていたはずである。まず本来の務めである商売に精を出し、どうすれば商売が繁盛するかを互いに工夫し、編み出したものが「繁盛しぐさ」「商人しぐさ」と呼ばれるものであると考えられる。彼らが身分制度を乗り越え、優越感を感じるのは唯一財をなすことであった。権力を持っていた武士に対して、真っ向から立ち向かうのではなく、商人は商人同士で助け合う互助精神を通して豊かな人情味溢れる平和な生活を送ることに幸せを見出したと考察する。どのように頑張っても身分階級が変わらなければ、同じ身分同士で集まり、慰めあい、励ましあい、幸せを探る方策を考え、その結果「江戸しぐさ」が生まれたと考える。

江戸しぐさの発端は商人が自分の商売繁盛のためだけに考え出した営利主義的なものであったと推察するが、前述の4.の江戸しぐさの代表的な処世訓と処世術のしぐさから商売繁盛させるためのものであっても人間関係に関するものが見られる。商人以外の世間一般の人々に対するお互いに気遣う気持ちを大切に作る動作が多く含まれる。例えば8.「肩引き」から12.「こぶし腰浮かせ」までのしぐさには町民同士が気持ちよく生活できるように、他者を思いやる、他者と共存するという共生共存主義の思いが見られる。

江戸時代も中期になると、「商人しぐさ」や「繁盛しぐさ」で商売繁盛し、次第に経済的に実力を身につけた江戸の商人たちは、豪商も現れた。紀伊国屋文左衛門がその例である。豊かな生活が送れるようになった商人は、身分階級に対する不満はほとんどなく、並行して商売のみならず市民生活も豊かに過ごしたいとの思いが生まれるようになったと考える。逆に経済的に苦しい旗本や御家人なども多く存在した。また浪人も貧しい生活を送っていた。商人はそのような武士に金貸しの役目も果たしていた。精神的には武士階級を凌駕した感覚になっていたものと推測する。

## 7. 江戸しぐさと陽明学の接点

江戸中期になって経済も発展し、商人たちは生活を謳歌していた。人間は食べることが充足すれば次に願うのは精神的な充足である。商売がうまくいっている商人が次に望んだのは学問で

あった。將軍家に出入りする商人のリーダーは江戸城での武士の礼法を学びたいという思いが生まれてきたとしても不自然ではない。武士の正式な礼法を自分たちも見習いたい、しかし武士の礼法はお止め流として一般庶民には公開されていなかった。一部の商人は経済的に苦しい武士から、似非小笠原流礼法の師範から正式ではない礼法を習っていたようである。大方の商人には誰からも教わる手立てはない。そこで自分たちで商人のあり方を学び、商売を継続させるために自分の息子にも高度な学問を学ばせようという希望は大いにあった。そこで講で陽明学の先生から思想を学んだと推察できる。当時日本陽明学の祖と言われる中江藤樹の弟子が江戸にも居たことが江戸しぐさをさらに高めていったと考えられる。「特に中江藤樹の弟子の淵岡山ふちこうざんの系列です。その系列が、[江戸しぐさ]とおそらくクロスオーバーするだろうと考えられます。あと江戸藤樹学派のリーダーだったふたみなおのぶ二見直養も淵岡山の系列ですね。」<sup>4)</sup> また淵岡山の一派は大坂、京都、江戸、会津などにもその教えを広めていったと林田は述べている。人格を高めようとする志の高い商人たちは中江藤樹の唱えた陽明学をその弟子から学んでいたと考えられる。当時の幕府の学問は朱子学であった。しかし実践を優先する陽明学は一般庶民にはありがたい教えであり、積極的に取り入れられたと思われる。

## 8. 江戸しぐさのバックにある陽明学の知行合一

江戸しぐさは「その人が培ってきた考え方や思いが、その場、その時に、反射的に形になって外に出たもの」である<sup>5)</sup>。これが江戸しぐさの特徴である。心に思ったことが瞬時に行動に出る、「瞬間芸」であると越川は述べる。「瞬間に出るってことが、[陽明学]と瓜二つといってもいい。」<sup>6)</sup>とも述べている。越川はこれを「癖」として行動にでるものであると表現している。瞬間芸は簡単ではない。余程毎日鍛錬しないと瞬間には行動に出ないものである。

陽明学研究家の林田は、陽明学は江戸しぐさを育み、江戸しぐさの教えは陽明学の「知行合一」の教えと同じであると述べている。「思ったと同時に反射的に行動しなければ意味がない」<sup>7)</sup>すなわち思いイコール行動が江戸しぐさであると述べる。思いだけ十分に心に持っても行動が瞬時に表れなければ思い(知)があるとは言えない。知(心)と行(動)は同一であると。「義を見て為さざるは勇なきなり」の論語の諺と通じるものがある。但し行動は思いと同時に瞬時になさなければならない。

王陽明は『伝習録』下、26で弟子に、知行合一とは「今人の学問は只だ知と行を分ちて両件を成すに因つての故に、一念発動して是れ不善なりと雖も、然れども却つて未だ曾て行わざれば便ち去きて禁止せざること有り。(中略) 正に人の一念発動の処は便ち即には是れ行い了れるものなるを曉得し」<sup>8)</sup>とあり、知と行を分けて考えていない。「ある想念が頭をもたげた時点で、とりもおさず行為が完了したことなのだ」<sup>9)</sup>と説明している。想念=行為という考えである。

これは江戸しぐさの「思いが反射的に行動に移る」考えと同じである。また林田は「知行合

一」の説明として「心と身体は一つのものであり、思いと行動は一つのものだ」<sup>10)</sup>と説明している。

松川は「知も行もまた心のはたらきのそれぞれの側面なのであって、心の本来性——理に添うという一点において知と行は一つのことである」<sup>11)</sup>と述べている。このような解釈において江戸しぐさの教えは確かに陽明学の知行合一の教えと共通点がある。江戸しぐさの例では、狭い路地で対向から人が来ればお互いが蟹のように横歩きして接触を避け譲り合いの精神の表れの「蟹歩き」や「肩引き」が該当する。足を踏まれたときなどに目を吊り上げて怒るのではなく「自分もうっかりしていて危険に気付かなかった」という気持ちをしぐさで表す「うかつあやまり」なども該当する。さしずめ現代では、電車の中で脚腰の弱った老人が乗ってきたときに、席に座っている若者が瞬時に立ち上がり「どうぞおかけください」と声をかける動作である。思いを抱けば同時に何か行動することである。

人の思いが反射的に行動に移す最も身近な例は、我々が言葉を発する行動である。人は相手に対する思いを瞬時に言葉に表現する。試験に合格した友人に思わず「おめでとう！」とお祝いの気持ちを言う。御礼の気持ちを表すとき、「ありがとうございます」と感謝の言葉を発し、同時にお辞儀をしている。人に迷惑をかけたとき、「すみませんでした」とお詫びの言葉を発すると同時にやはりお辞儀をしている。一々考えて言葉を発していないし、考えて行動もとらない。これと同様のことが「江戸しぐさ」の教えである。

同じ思いでも感情が含まれている思いは、人間は瞬時に行動に出る。しかし他者に対する思いやり、配慮など緊急を要しない、感情の念が薄い思いに対してはなかなか行動に出せない。これは日常の訓練が必要である。またその行動が、越川が言うように「くせ」になるように日ごろからの努力が必要となる。人間の思いが行動と同一になるのは、余程の鍛錬が必要である。

例えば川でおぼれている人を助けたいと思う気持ちがあっても、自分が泳げなければ川に飛び込んで救う行動は表れない。このような江戸しぐさを伝授した町の指導者達は恐らく当時の淵岡山の一派を初め、陽明学の師に学んだと考えられる。

## 9. 知行合一と聖書の教えの共通点

陽明学の「知行合一」の教え、思い（知）と動作（行）は同じであるという思想はキリスト教の新約聖書にも共通点が見られる。「『行』という場合、情が動くのも『行』に含まれる、とするのが陽明学である。」<sup>12)</sup>すなわち、新約聖書マタイの福音書5章、28節に「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」とある教えである。心と行動は一つのものであるとする考えと一致する。例え行動に現わさずとも心で思うことは行動を現したものと見做されている。キリスト教の教えは正に知行同一の考えである。しかし江戸時代はキリスト教廃止令が出ていたことから、キリスト教の教えが江戸しぐさに影響を与えたとは考えにくい。



## 10. 致 良 知

陽明学の「致良知」の良知とは「同情心、博愛（友愛）、良心あるいは儒教でいう仁のこと」<sup>13)</sup>だ。まさに他者に対する思いやり、博愛精神などを指す。江戸しぐさに見る他者に対する思いやりの心は、代表的なものとして挙げた「江戸しぐさ」の8～14の教え、傘傾げや蟹歩き、会釈のまなざしなどに見られる。このような部分には致良知の教えが影響を与えたと思われる。

## 11. お わ り に

以上のように「江戸しぐさ」を主に陽明学の「知行合一」と「致良知」の角度から視てきた。江戸しぐさは少なからず陽明学の「知行合一」と「致良知」の影響を受けたと考えられる。また江戸しぐさは「しぐさ」と呼び「礼儀作法」という名前で呼ばなかった。それは机上の学問ではなく、実践することを重視した実践生活哲学であったと言える。識字率の低い江戸町人に直接しぐさで教え実践させたところに意味がある。これは近江出身で日本の陽明学の開祖と言われている中江藤樹の学派の教えが「経典が読めなくても、実践を通じて「[陽明学]の教えを体得すればそれでいい」<sup>14)</sup>としたことから「江戸しぐさ」は大いに陽明学の藤樹学派の影響が大であると考えられる。また字の読める者には「お心肥」のように四書五経を学ぶことを奨励している。当時の商人が四書五経を誰の指南も受けずに学んでいたとは考えにくい。陽明学の研究者、淵岡山本人、またはその一派は全国をまわっていた。これらの一派が江戸で請われて講などで商人に人間としての生き方、実践哲学を教えたと考察する。

武士の世から商人の世に移り、商人たちは陽明学の思想を巧みに江戸しぐさに取り入れ、自分たちの商人道を実践哲学に昇華していったことは意味あることである。江戸しぐさは語り部によって伝承されてきたため、文書で明確に書かれた資料がない。しかし江戸の町民が道徳的に質の高い人生哲学を身につけて江戸文化を謳歌していたことがわかる。

## 引 用 文 献

- 1) 『「江戸しぐさ」完全理解』越川禮子、林田明大、2006年、株式会社三五館、p. 21
- 2) 『広辞苑』新村 出編、第五版、岩波書店、1998年
- 3) 『「江戸しぐさ」完全理解』越川禮子、林田明大、2006年、株式会社三五館、p. 29
- 4) 同上、p. 167
- 5) 同上、p. 29
- 6) 同上、p. 172
- 7) 同上、p. 125
- 8) 『王陽明のことば』松川健二、(財)斯文会、2008年、p. 43
- 9) 同上、p. 42
- 10) 『真説「陽明学」入門』、林田明大、株式会社三五館、2010年、p. 176

## 「江戸しぐさ」に見る陽明学の影響

- 11) 『王陽明のことば』松川健二，(財)斯文会，2008年，p. 48
- 12) 『真説「陽明学」入門』，林田明大，株式会社三五館，2010年，p. 193
- 13) 同上，p. 200
- 14) 『「江戸しぐさ」完全理解』越川禮子，林田明大，株式会社三五館，2006年，p. 170

## 参 考 文 献

- 小笠原忠統『小笠原流礼法入門』日本文芸社，1991年  
小笠原忠統『図解 立ち居振舞い 小笠原流礼法入門』上 日本文芸社，1992年  
『新改訳 新約聖書』日本聖書刊行会，1995年  
越川禮子，林田明大『「江戸しぐさ」完全理解』，株式会社三五館，2006年  
越川禮子『商人道「江戸しぐさ」の知恵袋』株式会社 講談社，2006年  
越川禮子『身につけよう！江戸しぐさ』KK ロングセラーズ，2007年  
越川禮子監修『図説 暮らしとしきたりが見えてくる江戸しぐさ』株式会社 青春出版社，2007年  
松川健二『王陽明のことば』，(財)斯文会，2008年  
越川禮子『暮らしうるおう江戸しぐさ』朝日新聞出版，2009年  
林田明大『真説「陽明学」入門』株式会社三五館，2010年